学長対談

「どの国の子どもたちにも幸せになる権利があるのです！」

(財)日本ユニセフ協会奈良県支部専務理事　山藤エリザベスさん
奈良教育大学長　大久保哲夫

現在、教育の現場が、さまざまな変化の中でどのように進むことが正しいのかを問われる時代になってきている。

小学校・中学校などでは不登校、学級崩壊、学力低下などの問題が継続され、国立大学は、平成十六年度に施行される国立大学法人化に向け、大きな変貌の時期を迎えようとしている。文部科学省が提起した「大学（国立大学）の構造改革方針」では教員養成系の再編・統合が示されている。教員養成系大学の未来はどう変わっていくのだろうか。

そんな中、奈良教育大学も教育現場や地域と密着・連携して、子どもの教育について、さまざまな取り組み・活動を行ってきているが、これからの社会を担う子どもたちに高等教育機関がどのような機能を果たすことができるか、どのような姿こそが真の教育者を育てることができるのかなど課題は山積みとなっている。

子どもの人権・生活・未来、教育、健康、地域・ボランティア、生涯学習など、地球規模で活動を行い、その頂点にたつ機関でもあるユニセフ（国際連合児童基金）。本号では（財）日本ユニセフ協会奈良県支部の山藤エリザベスさんをお招きして、今、ユニセフでキャンペーン中の教育について大久保哲夫学長とお話をしていただいた。

■奈良教育大学という財産

学長　本日はお忙しい中、わざわざお越しいただきましてありがとうございます。

山藤　いいえ。今まで何度か奈良教育大学には寄せていただいていますが、こちらまでの道筋は奈良公園を通ってくるので楽しいですね。

学長　そうですね。国立大学の中でも、構内を鹿が歩いている大学はここだけでしょうね。良い環境です。

山藤　先日、奈良市杉岡華邨書道美術館を訪れた時に、展示されている作者たちのほとんどが奈良教育大学の出身者だったので驚きました。

学長　墨や筆が特産物でもある奈良という土地柄、昔から本学は書道が盛んでしたから、全国的にも有名な書道家たちが卒業生でもありますね。本学の特徴でもあります。

山藤　地域の特徴がそのまま地元の大学の特徴になり、次の時代に引き継がれてきているのですね。

学長　そうですね。前身である師範学校の時代からの歴史がありますので、教育の場のみならず、他にもさまざまな分野で活躍されている卒業生は多いですよ。

山藤　奈良教育大学は地元にとって貴重な存在、財産ですよ。

学長　ありがとうございます。そんな財産をきちんと守っていかないといけないとも思っています。

■これからの教育を担う機関として……

山藤　そういえば気になっていることがあります。平成十六年から国立大学法人化で、それぞれの国立の学校が独自に運営するということになるようですが、それにともなって奈良教育大学がどうなるかとい

うことです。国立大学法人になると何が変わりますか。

学長　国からの補助金はありますが、その他、自己収入をあげていかなければいけなくなりますね。運営費をどこからか捻出しなければいけなくなるのです。教育系の大学ですので、どこかの民間企業と共同研究により資金をということもなかなか難しく……。ただ現在、国の方でも国立大学を再編・統合しようという方針を出したのですが、実際には簡単に事が進んでいかないという状況ですね。

山藤　これからの教育を担う人材を育てる大切な機関（大学）ですから、地元の人間としても、教育が深く関わってくるユニセフの人間としても、奈良教育大学の行く末がとても心配です。

学長　今までもがそうだったように、各県に師範学校があって、そこで学んだ人が地元の先生になって活躍しているのですから、その機関がなくなってしまうということは地元にとっても大変な損失になります。なんとか今までどおりにやっていけないのかという声があちこちで起こってきているものですから、そう簡単になくすという問題ではなくなってきつつあるというのが現状です。今のユニセフのメインテーマも教育ですよね。

山藤　はい。健康も大切ですが、貧困から子どもたちが教育を受けられないでいるのです。人身売買が余儀なく行われている状況の国もあります。そんな国の子どもたちほど親孝行で、親のためならという素直な子どもが多いですね。小さい頃から家族のために働いて……。日本も昔、そうだったようですね。

山藤エリザベス

PROFILE

アメリカ・ニューヨーク州出身
ロチェスター大学卒業（日本学専攻）
在学中一年間早稲田大学に留学
ミシガン大学大学院修士課程修了（日本学専攻）
結婚と同時に来日。1996年（平成8年）日本国籍に帰化。
私立高校での英会話講師の経験を持ち、現在はさまざまな公的委員会委員、財団発行情報誌の英訳などを手掛ける。
現財日本ユニセフ協会奈良県支部専務理事兼同事務局長。

学長　戦前ですね。明治から大正時代にかけて、小さい子どもも働いていましたからね。

■世界レベル・地球規模で子どもを考える

山藤　ヨーロッパやアメリカにも、そういう時代があったのです。どこの国もみんな同じ道を歩いていますよね。学校や家庭の教育だけでなく、食べ物や燃料、緑や大気などの天然資源、世界レベル、地球規模で考えると、これからの子どもたちを取り巻く心配は絶えることがありません。私たち奈良県支部としても、ひとりでも多くの世界の子どもたちが幸せになるように、共感し一緒に活動してくれる仲間を増やしていきたいと思っているのですが……。

学長　残念ながら奈良教育大学内には、まだそのような活動を広めようという学生たちの動きが発生していないようです。奈良の若い世代はユニセフに関わっていますか。

山藤　一部の学校では、ユニセフのサークルができています。「英語に興味を持っている」、「ワールドワイドな視野で物事を考えたい」などの思いを持っている人たちが集まってできたサークルですが、ユニセフにある世界の資料を上手に活用していくうちに、自分たちも何かをしなければいけないと感じて動き出したようです。また、数年前から小学校六年生の教科書にユニセフが紹介されるようになり、徐々にですが活動を身近に感じてきてくれている子どもたちが増えているようです。

学長　今後、学生たちの個人レベルから発展して広まっていけば良いなと期待していますが、まだまだ日本人の感覚ではボランティアをするということに対して、ある意味、構えるところがあるのでしょうか。

■ボランティアの意義

山藤　ボランティアに関して、「外国人は上手だが日本人は下手」とよくいわれていますが、アメリカでは自分以外の人のことを思いやって、何かをすることをほとんど〝ボランティア〟といいます。しかし日本では同じようなことをすると「義務でやっている」というのです。お国柄でしょうか。アメリカ人は自分自身が考えて行動したいと思いたがり、日本人はみんなで決めたことだから、協力しないといけないと思いたがっているように感じます。神様の目を気にしているか、周りの人間（世間）の目を気にしているかの違いでしょうか。どちらにしても自分以外の人の役にたつということが肝心で、その意味では日本人はどの国の人にも負けていないと私は確信しています。

学長　ところで普段の活動はどのようなものですか。

山藤　毎日の活動は、奈良県支部の中での小さな動きでしかありません。本当に地味なものです。ユニセフの支援活動は、まず募

金活動が中心に行われています。その中でカードやカレンダー、ネクタイ、オモチャなどのギフト販売もし、啓発活動として講習会や写真展等も行っているのです。

学長　奈良県支部ならではの活動はありますか。

山藤　一般の方に加えて、寺社等にお願いしてお賽銭箱に入っている外国コインを募金していただいています。支部独自では、ボランティアスタッフが使用済み切手を集めて、鳥や美術画等のシリーズでまとめたもの、子どものコレクションや外国向けのおみやげ用に販売し、収益金を本部に送っています。

■小さな活動から大きな支援へ

学長　ボランティアスタッフの細かい作業や地味な活動があってこそ、その収益金がユニセフの支援の原動力になり、世界の子どもたちが幸せになるのですよね。

山藤　そう望んでいます。ユニセフが関わっている百六十二の国と地域の子どもたちへの健康や教育の支援事業のすべてが、各国の政府と民間の寄付（募金）で賄っているのです。ちなみに過去三年間、うれしいことに日本から送られている民間支援が世界で一番多いのです。

学長　奈良県支部の前身、（財）日本ユニセフ協会西奈良友の会、もっとその前の奈良市・西登美ヶ丘地区での草の根的活動は、山藤さんから始まったと聞いています。ユニセフの活動を始められた動機はどのようなことからですか。いつ頃からですか。

山藤　奈良に来てからです。息子たちが大きくなって、何かできることがないかと思っていた矢先に、小さな新聞記事でユニセフのカード販売の広告が出ていたのです。それがきっかけでしょうか。本当はもっとさかのぼってアメリカの大学の時、サークルでユニセフカードを販売する活動をしていました。小学生の時から国連の活動に憧れていて、その中でもユニセフは、何の資格を持たなくても活動ができるということを知っていましたので……。私自身も大学院を出ましたが、その方面の専門的なことをしていませんでした。しかしどんな人間でもユニセフを通して困っている子どもたちの助けになることもできるのです。すごいことだと思いませんか。

■日本と外国の教育の違い?!

学長　本当にそうですね。山藤さんはご結婚前にも奈良に来られたことがあるとうかがっていますが……。

山藤　昭和三十五年に交換留学生として静岡県清水市に三カ月間滞在していたことがあります。その時、ホストファミリーのお父さんが奈良大好きで、連れてきてもらったのです。学長先生はその時代は何をされていましたか。

学長　私はその年にちょうど国立大学の教員として勤務し始めました。今年で四十三年目ですね。最初は山陰の方の島根大学で、一九七二年にこちらの奈良教育大学に赴任をしましてね、ですからこの大学ではちょうど三十年が過ぎました。

山藤　奈良との関係が、もうお長いのですね。本当に良い所ですよね。私は大好きです。外国出身者からしたら、こんな良い所はありませんよ。日本の教育も好きです。学級崩壊とかいろいろと教育の現場では問題があるようですが、息子が小学校の時、クラスのまとまりがすごく良かったことを覚えています。三男が小学校五年生の時に、主人の仕事の関係でロンドンに四年間滞在したのですが、むこうで息子が通っていたアメリカンスクールの印象は、個人主義というか、バラバラでしたね。

学長　クラスのサイズの違いもありますね。日本が四十人、四十五人学級の時に、イギリスなどは二十人学級でしたからね。以前にイギリスの学校関係をいくつか視察したことがありますが、日本は一斉授業に対して、むこうはグループ授業です。教科にもよりますが、それぞれが自分の課題をやっていて、先生がそれぞれを教えにまわっているという状態ですね。授業スタイルが全く違いますから、統制が効いていて良いのか、悪いのかというところで……。日本の教育現場のように、何かをする時に揃っていれば見た目にはきれいですが、しかしいわれるがままに動いているだけかもしれないという……。どちらが良いのかは難しいところです。

山藤　私はどちらかといえば、その当時の日本の学校のやり方は気に入っていましたね（笑）。海外に行くと良い面と悪い面の違いがわかります。そういえばあの当時、イギリスでは日本の教育が良いと新聞に

よく出ていましたよ。

学長　ちょうど十六年程前ですね。イギリスでサッチャー首相が出てこられた時で、日本に学べということで、ナショナルカリュキュラムというものを作った時代です。その時は奈良教育大学にも調査に来られましたよ。大学の先生方が附属学校などを回り、日本の教育を視察して教育改革を行ったのです。日本の教育はその頃から、「ゆとりの……」という逆な方向に歩き始めるのですけれども。

■未来に対応できる人材育成

山藤　ゆとりの教育はどうなんでしょうか。最近特に学力低下についても問題になっていますね。それと生徒と先生の関係がずれてきているとも聞いています。私のアメリカの高校時代の恩師が嘆いていたことがあります。年々、生徒たちから先生に対する尊敬心がなくなってきているというのです。私たちの時は、とても意志の強い女性で、クラスのコントロールもじょうずにする先生だったのですが……。生徒たちの秩序がなくなってきているようです。日本でも同じことを聞くことがあります。奈良市内小学校の校長先生とお話する機会があったのですが、以前は「教員ほど素晴らしい職業はない！」といっていたのに最近では、教師になろうという教え子に「覚悟したほうがいい」といっているらしいのです。とても淋しい気持ちだともおっしゃっていました。そういえばその校長先生も奈良教育大学の卒業生でした。

学長　教育の現場も難しい時期にきていると本当に思います。奈良教育大学においては大学院で現職教員対象の夜間コースを一九九九年に新設し、教育実践総合センターなどで、教育実践の研究や研修を行うなど、現職教員の方たちへのサポートをさまざまな体制で行っています。また教職に対する使命感や、教師としての豊な人間性、現代的な専門知識、課題解決能力、幅広い教養等を基礎とした実践的な指導力を持つ人材の育成、教育学部の蓄積を生かしての生涯学習社会に適応する教育者養成などを具体的な目標において、これからの教育現場で正しく対応できるよう学生たちを指導しています。

山藤　社会の移り変わりとともに子どもたちも変化してきていますから、先生側も変化に対応しなければいけないということでしょうか。といって今の子どもたちが自分勝手だとは思っていません。ボランティア精神に関して、最近の小学生が結構、頼もしいのです。小学校での総合的学習の導入で国際理解をひとつの柱にしているようなのですが、ユニセフについても学び、いろいろ考えているのです。世界で三秒に一人、五歳未満の子どもたちが死亡している現実。病気や、貧困による栄養失調、水の汚染……。予防接種を受けるだけで助かったはずの子どもたち……。小さい頃から家計を助けるために働く子どもたち、そのため教育を受ける時間がない。例えば井戸があれば、今まで水汲みに費やしていた時間で、教育を受けることができるのに……。そういう日本とは違う現実を日本の子どもたちに正しく理解してもらうことが大切です。先生たちのヒントの与え方、テーマの持って行き方で子どもたちの興味が変わってきますからね。

学長　そうです、教師のチャンスの与え方がポイントなのです。きっかけというか、子どもたちが興味を持つような、力を発揮させるような。そこのところは教師がきちんと組織し、導いていかないと、自然に生まれるものではないですね。地域や家庭とともに学校や教師自身が子どもたちにとっては環境になるのですから重要です。奈良教育大学からも、そういう子どもたちに、力を発揮させることのできる質の高い教育者が生まれてきていると信じています。

山藤　はい、素晴らしい人材がこれからも多く巣立っていくことでしょう。世界の幸せを考える子どもたちの育成を担っていってほしいです。本当に環境が子どもたちの成長に与えるものは大きいですから。今日は教育者である大久保学長のお話をうかがって、これからの子どもたちに、また一筋の輝かしい光を見つけたような気がします。ありがとうございました。

学長　こちらこそありがとうございました。